

# 堀河百首題「橋」をめぐって 内藤愛子

堀河百首題は特殊な歌題が多く含まれている。特に、雑の歌題は二十題あり、そのうち『堀河百首』以前において歌題として定着していない歌題が多数をしめ、「無常」「述懐」「祝詞」を除く歌題は勅撰集及び歌合の主題歌題として見出すことが出来ない。しかも雑の歌題と同致な歌題がみられるのは『和漢朗詠集』の歌題及び『古今六帖』の分類に多くみられるだけである。

『和漢朗詠集』においては「晝」「松」「竹」「鶴」「山」「旅」「別」「山家」「田家」「懷舊」「述懐」の十一歌題までが同致な歌題であり、先学の指摘されるように歌題の一致率の高いことから『堀河百首』の雑の歌題は『和漢朗詠集』を典拠に求めていると思われる。

だが、雑の歌題のうち、『和漢朗詠集』と一致しない歌題「苔」「河」「野」「関」「橋」「海路」「夢」「無常」の八歌題であるが、それらの歌題の詠歌をみてみると、「苔」「夢」「無常」の三歌題を除いた歌題の詠歌には共通の特徴が見出せる。

それら「河」「野」「関」「橋」「海路」の五歌題の詠歌の特徴は、いずれも歌枕を詠み込まれたものが多数を占めている点である。

それら五歌題以外の雑の歌題において、歌枕に拠った詠歌を多数含んでいる歌題としては「山」がみられるのみで、それらは歌枕が歌題のもつ性格や設定に不可欠な要素であったと思われる。また、これらの歌題は歌枕を詠み込むべき歌題として設けられた歌題と推察が可能であろう。

今回はそれらの歌題の一つである「橋」の歌題を取り上げ、その歌題をめぐって私見を述べてみたい。

「橋」は『堀河百首』以前には歌題としての定着がみられず、『古今六帖』においてのみ、橋の分類がみえる。また、『堀河百首』の雑の歌題は勅撰集の雑の構成内容と共通な点が多くみられることから、『堀河百首』以前の勅撰集において「橋」がどのように用いられているか調査してみると、「橋」は『万葉集』より歌材としてみられ、勅撰集においては『古今集』以来、用いられている。

因みに、『古今集』においては橋を歌材とした詠歌は六首あり、恋四、恋五、雑上、雑鉢の各部立に属し、そのうちの五首は歌枕に拠ったもので、一首を除いては「長柄の橋」が詠まれている。恋の

部立には三首みえ、そのうちの825・826は各々橋に途絶えし恋を寄せた詠歌で、男女の仲の絶えた詠嘆である。

825わすらるゝ身をうち橋の中絶てひともかよはぬとしぞへにける  
826あふ事をながらの橋のながらへてこひわたるまに年ぞへにける  
であり、825は「宇治橋」に「憂し」を掛け、826は「長柄の橋」に「永し」を掛け、修辭技巧がみられる。

また、雑並びに雑躰の部立の主題配列に「長柄の橋」がみえ、890・051の二首は年老いた我身を嘆く詠歌であり、「長柄の橋」は古いものたとえや年月、時間の経過の表象を伴っている歌枕である。

890世の中にふりぬる物はつづくにの長柄の橋とわれとなりけり  
101なにはなる長柄の橋もつくる也いまはわが身をなにくたとへん  
また、「長柄の橋」は、仮名序に「今はふじの山も煙たたずなりながらの橋もつくるなりとさく」とあり、その「つくる」と101の「つくる」の解釈に関しては古来から諸説が述べられている。<sup>注②)</sup>

『後撰集』には橋を歌材とした詠歌は八首あり、一首を除いては歌枕に扱った歌である。歌枕として、「八橋」「佐野の舟橋」「久米路の橋」があり、八首のうち六首は恋の部立に属し、その中の四首(775・986・987・940)は『古今集』と同様に男女の仲が絶えがちになる詠嘆であり、そのような状況を「久米路の橋」に寄せた詠歌は775・986・987の三首見出せる。

心ざしありて、人にいひかはし侍けるつれなかりければ、  
いひわづらひてやみにけるを思ひ出て、しきりにいひおくり  
ける返事に心ならぬさまなりといへりければ

775かつらきやくめちの橋にあらばこそ思ふ心をなからせめ  
かれにけるをこの思ひ出まできて、物などいひてかへりて

986かつらきやくめちにわたす岩橋のなか／＼にてもかへりぬるかな  
かへし

987中たえてくる人もなきかつらきのくめちの橋はいまもあやうし  
このように、「久米路の橋」は役の行者が葛城山の山神一言主神に命じて、葛城山と吉野の金峰山にかけ渡そうとした伝説上の橋で、夜が明けてしまい工事が完成しなかったという伝説を典故とし、男女の仲の途絶えや男女の契りの成就しないという觀念の結び付いた歌枕として意識されている。その他の二首は雑一の部立に二首(1118・1119)みえ、七條后と伊勢との贈答歌であり、「長柄の橋」は、やはり『古今集』と同様な觀念をもつ歌枕として使用されている。

法皇、御ぐしおろし給ひてのころ

1118人わたすことだになきをなにかも長柄の橋と身のなりぬらん  
御かへし

1119ふるゝ身は涙のなかに見ゆればや長柄の橋にあやまたるらん  
『拾遺集』においては橋を歌材とした詠歌は九首みえ、やはり歌枕が多用され、「八橋」「浜名の橋」「久米路の橋」「木曾路の橋」である。恋の部立(雑恋を含む)に四首みられ、いずれも恋の仲が途絶えてしまう状況が詠まれている。また、別の部立には三首みえ、そのうちの二首(317・318)は詞書から地方の役人として任地へ赴む際の別れの詠歌で、橋の縁詞「わたす」を用いて、別れの思いを告げている。

源よしたねが参河の介にて侍けるむすめのもとに母の読つ  
かはしける

317もろともゆかぬ三河のやつはしは恋しとのみや思ひわたらん

かねもり、駿河の守にて下り侍ける、むまのはなむけし侍とて

318 わかれ路はわたせる橋もなき物をいかでかつねに恋わたるべき  
雑上の部立には「長柄の橋」の描かれた屏風を見ての歌が一首  
(468)のみである。

天曆御時、御屏風の多に、ながらの橋柱わづかにのこれる  
468 あしまより見ゆる長柄の橋柱むかしのあとのしるべなりけり  
とあり、長柄の橋の跡に残った橋柱が描かれた屏風絵からの発想で  
あり、長柄の橋に対して橋柱のみ残るといふ朽ちた橋のイメージが  
勅撰集においてこの詠歌以前には見られず、長柄の橋のイメージの  
定着化に影響を与えたのではないかと思われる。

『後拾遺集』には橋を歌材とした詠歌は七首あり、羈旅、恋三、  
恋四、雑一、雑四の各々の部立にみられ、歌枕は「浜名の橋」「緒  
絶の橋」「真野の継橋」であり、恋の部立の751・789は途絶えし恋の  
詠歌で、雑一の881も途絶えている状況が詠まれ、いずれもそのよう  
な状況を橋の歌枕に寄せている。また、雑四には三首(1073・1074・1075)  
あり、それらは主題構成からみると、歌枕に拠った詠歌が七首配列  
されている歌群のなかに位置している。それら三首はいずれも「長  
柄の橋」を主題とした詠歌である。

長柄橋にて、よみ侍ける

1073 橋柱なからましかばながれての名をこそきかめあとを見ましや  
天王寺にまゐるとて、長柄の橋をみて読侍ける

1074 我ばかり長柄の橋は朽にけりなにはのこともふるゝかなしき

上東門院、住吉にまゐらせ給て帰るに、人々歌よみ侍けるに  
1075 いにしへにふりゆく身こそあはれなれ昔ながらの橋を見るにも

この三首は、「長柄の橋」が朽ちた古いものという観念的理解をも  
つ歌枕であり、旧懐的色彩が見出せる。その三首のうち二首は詞書  
から、天王寺詣、住吉詣の折に長柄の橋をみての詠歌であり、『栄  
花物語』第三十八卷「松のしづえ」において、後三条院が住吉詣の  
折の記述に

「これは長柄となん申す」という程に、「その橋はありや」と尋  
ねさせ給へば候よし申す。御船とよめて御覧すれば、古き橋の柱  
たゞ一残り。今は我身を」といひたるは、昔もかく古りてあ  
りけると思もあはれなり。

とあり、当時(延久五年)において、「長柄の橋」は古い橋柱の跡  
であり、それを尋ねる程の名所として有名であったと思われる。ま  
た、長柄の橋は昔から橋柱のみ残り、朽ちてしまった橋という旧懐  
的な心情が窺える。

このことから「長柄の橋」は単に朽ちた橋のイメージではなく、  
朽ちた橋に対して移り変るといふ時間経過に懐旧の心情が結び付い  
た歌枕として捉えられる。

このように、『堀河百首』以前の勅撰集において、単なる橋を歌  
材とするよりも、場所とイメージや観念の結び付いた歌枕である橋  
に拠った詠歌がほとんどをしめ、その歌枕の種類も『古今集』以  
後、増加の傾向を示している。

しかも、それらの詠歌が勅撰集において恋や雑の部立に配列され  
ているという現象が窺われる。そして、勅撰集における恋の部立構  
成は恋愛の進行過程に沿っていることから考慮すると、途絶えし恋  
の嘆きを橋に閑した歌枕に托した詠歌が多数あることから、恋の部  
立の後半に配列されるということは察せよう。雑の部立においては

『古今集』以来、「長柄の橋」を主題とした詠歌がみられ、勅撰集の主題構成上の一つの主題として位置が認められていたと考えられ、歌枕としての「長柄の橋」は勅撰集の流れに伴って、単に古いものたえの典型から橋柱の跡が永い間残るといふ時間経過に対する懐旧の情を付加し、微細ながら新しいものを付加しようとする試みがみられるであろう。

以上のように、「堀河百首」以前の勅撰集において「橋」は歌題として独立しているとは言いが得ないが、『古今集』以来、「長柄の橋」は主題として雑の部立に定着が窺われる。その事から察すると、『堀河百首』の雑の歌題の設定に当って「橋」は「長柄の橋」という主題を意識しながら、一般的なイメージの広がりをもつ単題で、しかも歌枕歌題として取り上げられたと考えられるだろう。

次に、「堀河百首」において、「橋」の歌題がどのように詠まれているかみてみると、十六首のうち十三首までが歌枕を用いているということが指摘できる。歌枕を上げてみると次のようである。板倉の橋(142) 瀬田の長橋(142) 浜名の橋(142・143) 佐野の舟橋(142) 真野の継橋(143) 小墾田の板田の橋(141・142・143) そのうち141は小墾田の板田の沼で、142は板田の橋である。宇治橋(143) 布留野沢(143) 八橋(143) 木曾路の橋(143) であり、このように多数に及ぶ歌枕がみられる。その中に「小墾田の板田の橋」は『万葉集』巻十一264に264小墾田の板田の橋のこほれなはけたよりいかにふなわきもことあり、この万葉歌を典拠としたものとして『狭衣物語』巻一の上におのづから貴きも賤しきも尋ね寄りつゝ、板田の橋は朽つれど、いとけぢかさ程にこそあらね、立ち聞き垣間見など

とあり、板田の橋は朽ちている橋として捉えられている。また、『堀河百首』においても「板田の橋」は朽ちた橋として詠じられている。「小墾田の板田の橋」は『堀河百首』以前にはあまり使用されない珍しい歌枕であり、『平安和歌歌枕地名索引』によると『和泉式部集I』39(「私家集大成中古II」)にみえるのみである。

239なをやめにみかへさるゝををはたゝのはしほほれもそする  
また、『古今集』以来、詠じられてきた伝統的な歌枕である「長柄の橋」が見られないことは注目される。

次に、類型表現をみてみると、橋や橋桁が壊れている状況を詠じた類型歌が十一首みえ、そのうちの七首(1426・1427・1428・1431・1434・1436・1439)は、橋や橋桁が朽ちて通行が困難になることや橋が壊われて橋桁が残っていることや壊われた由に新しく橋を造ること等を歌意としている。そのうちの1426・1431は昔が生えるという比喻に拠って永い年月を経ていることを表象し、1426は「瀬田の長橋」に「永い」を掛けた詠歌である。又、掛詞や縁語を用いた詠歌は1436にみられるのみである。

1426 まきの板も昔むすばかりなりにけり幾世かへぬるせたの長橋  
1427 打わたすまきのいた橋朽にけりまれにも人のこはいかにせん  
1428 東路のはまなのはしのはし柱波はおれともまたたてりけり  
1431 けた朽て昔むしにけりをはた田の板田の沼にわたすたなはし  
1434 朽にけり人もかよはず石上ふるのゝ沢にわたすまろはし  
1436 今はみな橋板さへ朽はてゝはまなはかりをきゝわたるかな  
1439 わりなしやわたりかたきは信濃なるきそちの橋の絶ま也けり  
また、朽ちている橋に拠って恋愛を歌意とした詠歌として次の四首(1429・1432・1435・1440)が上げられる。

1429 東路のさのゝ舟橋朽ぬともいもしさためはかよはざらめや

1430 朝夕につたふ板田の橋なればけたさへ朽てたちろきにけり

1435 夜は暗しいもはた恋しをはたゝの板田の橋をいかふまゝし

1440 陸奥の朽木の橋も中絶てふみたに今はかよはざりけり

1429・1435の二首は、いずれも『万葉集』に本歌を求めることができる恋愛歌で、1429は『万葉集』342を、1435は同集の264を本歌とした詠歌である。又、1432の俊頼の歌もやはり264を典拠とし、橋桁のみ残る板田の橋の橋桁が朽ちるとし、ひとひねりした詠歌であると云える。

3420 上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれと吾は離るがへ

2644 小墾田の板田の橋のこはれなはけたよりいかんこふなわきもこ

1440は恋情の仲が絶えていることを嘆かれてゐる朽木の橋によせ、「中」に「仲」をかけた詠歌が、『古今集』以来、途絶えの恋を橋

に托すのと同様な発想で朽ちた橋にたとえている。これらのように朽ちた橋の状態を直接的に詠じた恋愛歌は『堀河百首』以前の勅撰集には見出せず。このように朽ちている橋を詠み入れた恋愛歌は新

奇な傾向として捉えられる。

次に、故事や物語を典拠とした詠歌が二首(1437・1438)みられる。

1437 思ふこと橋柱にそかきつけて昔の人はくらましかる

1438 さゝかにかのくもてにみゆる八橋をいかなる人か渡しそめけん

1437は「蒙求」の「相如題」柱」の故事を典拠としている。

蜀城北七里有「昇仙橋」。相如題「其柱」曰、「大丈夫不」乘「駟馬車」、不「復過」此橋。

『蒙求』は殊に、平安時代より貴族の子弟教育の教材にされていたものであり、貴族生活においては、かなり一般化された知識であったと考えられる。1438は『伊勢物語』第九段の東下りの物語世界を発

想の典拠とした詠歌である。このように、漢文の故事や物語に典拠を求めていることは発想の展開を試みていると考えられる。

「橋」の歌題において、叙景的な類型歌は三首(1425・1430・1433)でいずれも歌枕が詠み込まれている。

1425 板倉の橋は誰も渡れともいなおほせ鳥そすきかてにする

1430 明かたになりやしぬらんたえ／＼に真野のつきはし人渡る也

1433 浪をふむ心地こそすれ川霧の晴まもみえすたてりうち橋

以上のことから、『堀河百首』の「橋」の歌題において、朽ちている橋の詠歌が十六首のうち十一首を占めていることや「長柄の橋」が歌枕として用いた詠歌がみられないことは特徴として上げることが出来るであろう。だが、『堀河百首』以前の勅撰集において

朽ちている橋の詠歌は『後拾遺集』1074の一首のみみられる。

天王寺にまゐるとてながらの橋をみて説侍ける  
1074 わればかりながらの橋はくちにけりなにはのこともふるゝかなしき

この歌は、我身の老いを朽ちている長柄の橋にたとえ、この世の中の何事も長柄の橋のように移り変るといふ悲哀を懐旧的に詠じている。前述のように、『後拾遺集』における「長柄の橋」を詠じた歌

1073・1075も同様な傾向が見られる。また、『堀河百首』の「懐旧」の歌題に「長柄の橋」を詠み込まれた仲実の歌がみられる。

1527 朽にけりこれやなからの橋柱あはれむかしの跡はかりして

この歌も、朽ちて橋柱の残る長柄の橋に変転する世の中を寄せて、旧事を懐しむ情が詠まれている。このような傾向が色濃い内容をもつ詠歌として『散木奇歌集』1392(『千載集』107)に

天王寺にまうで侍けるにながらにてこゝなん橋のあとゝ申を

1392 ゆくすゑを思へば悲しつのにのながらの橋も名はのこりけりとあり、このことからすると『後拾遺集』以後から、「長柄の橋」は時の推移の持つ無惨さや古さに感慨を覚えるという懐旧の觀念をもつ歌枕として捉えられていたのである。それ故に、『堀河百首』の「橋」の歌題の詠歌に「長柄の橋」は用いられていないということが理解できるのではなからうか。

また、「橋」の歌題に対し、朽ちる橋を詠む発想の基盤<sup>註(6)</sup>には、少なからず「古今集」以来、詠じられ、しかも、民間伝承や説話になど語られ、つくりあげられた「長柄の橋」のイメージや前に触れたように、朽ちたイメージをもつ「板田の橋」が、なんらかの影響を与えているのではないかと考えられる。

勅撰集との関連という一面的な見方での粗雑な調査に過ぎないが、「堀河百首」において、朽ちる橋の発想に拠って「橋」の歌題を詠ずることが当時の歌人達の関心と視点であり、歌題の本意と考えられる。また、朽ちる橋と歌枕との組み合わせの新たな工夫がみられ、新しい発想方法の試みとして捉えることができるであろう。

注(1)久保田淳氏「藤原俊成の青年期の作品について(上)」(『国語と国文学』昭41・1)、松野陽一氏「組題構成意識の確立と継承」(『文学・語学』昭49・1) 橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究本文研究篇』第一章 組題の形成を参照。

注(2)『奥義抄』下の中(『日本歌学大系』第一巻) 難波なるながらのはしもつくる也今はわが身をなにくたとへん

此集雜部に、世中にふりゆくものはつこの國のながらはしと我身也けりといへる歌を本にてよめる也。誠に橋をつくるにはあらじ。かくたとへきたるにまかせてわが身のたぐひなきよしをいはんとて彼はしもつくるなりとはよめる也

『古今和歌余材抄』(『契沖全集』第八卷) 1051に「家集になからの橋もつくるときよとて此歌あり。……世の中にふりぬる物は津のくにのなからの橋と我となりけりといふ本にて、その橋もつくりられて人のしけくゆきかへは、ふるしてかよひくる人もなきわか身を、今は何にたとへてなくさまんとよめるなり。……古采風躰抄云此うたはなからのし朽ちにし後またつくねとも橋はつくりつへき物なるかゆゑにつくるとよめるはいかひの心にて侍るなりとあり」云々とある、など。

注(3)矢代和夫著「境の神々の物語」「ながらの橋姫」参照。「袋草子」上巻、「古本説話集」上巻第二十一「伯の母が仏事の事」、「宇治拾遺集」四二「同人仏事」等。